

南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
インドネシア語同窓会

2016年春 第22号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email: tani.kazuya.g@gmail.com

インドネシアと ささやかな自分史

とこなみ 床次 泰文 (1970卒)



今年2016年は、私事ながら、大阪外大インドネシア語科に入学してから丁度50周年。そんな機会に執筆させていただくことに感謝します。仕事としてインドネシアに関わったのは僅か数年間だけですが、気持ちとしては、常にインドネシアが身近にあったし、今もその状態を維持しています。

インドネシアとの出会い 中学3年生になったばかりのある日、国語担当の先生がとりとめもなく「今年の大阪外大はインドネシア語の競争率高かったね」とつぶやいた。びっくりした。あまり聞いたこともないアジアの国の言葉を大学で教えているなんて…。そして、その頃のテレビ人気番組「夢で会いましょう」の短い時間帯にかじりついた。日常会話の文例を10数カ国の外国語で紹介しており、その中にインドネシア語がある。ローマ字(ラテン文字)で、発音もローマ字読みに近いことなどをおぼろげながら知った。

感受性の強いこの時期に受けた最初の1滴は、その後の私の生き方を方向付ける大きな要因となった。高校は、たまたまであるが、当時上八にあった外大キャンパスから歩いて10分足らずの夕陽丘高校。時々、覗きに行っていた外大に、運良く合格することが出来た。

大学生生活 1966年度は語科には一挙に4人の女性が入学した。約20人での1クラスなので、70年安保の真っ最中、慌ただしかったとはいえ、それぞれ個性を発揮しあえる雰囲気でも過ごした4年間だった。

インドネシアでは前年1965年9月30日に劇的な政変があり、新聞では、連日、インドネシア共産



スマトラ・リアウ州奥地、竹の筏で川下り=2012年12月

党(PKI)とその支持者への弾圧・虐殺が報道された。ただ、学内ではこの激変はそれほど身近に感じるものではなく、インドネシアの民謡とともにスカルノ賛歌の“BERSUKARIA”も歌っていた。しかし、留学生別科にいた、顔見知りのインドネシア人留学生がいつの間にか姿を見せなくなっていた。あとで聞けばPKI容疑で本国に送還されたとのこと。

時は日本の高度成長期の終盤だったが、語科指定の求人は結構あり、私は落ちる度に資本金の大きな会社を受け、3度目の正直で総合電機メーカーに就職した。

37年余のサラリーマン生活 入社して最初の配属先は家電製品の輸出部門に。その後重電関係に移り、スタッフ・営業・プロジェクト管理・資材調達などの職務を経験したが、仕事を通じてインドネシアと直接間接関わったのは数年しかない。しかしその僅かな関わりでも、公私にわたり貴重な体験が出来た。

まずインドネシア語科入学10年目の1976年=入社6年目にして初めて待望のインドネシアへ。放送局関係の建設プロジェクトで約4カ月ジャカルタに滞在した。驚いたのはジャカルタ弁(?)。学校で習わなかった“nggak”の連発には戸惑った。まるで、大阪の街中で道を尋ねた外国人が、大阪弁での返事に首を傾げているようなもの。それでも、ようやく生活にも慣れた頃、知り合いになった年配女性から、ふと「私のおじが目の前で日本兵に殺されたの」と聞かされた。また、あるバスの運転手が「日本の歌を知っている」とほぼ完璧な日本語で「見よ東海の空あけて…」と歌い出した。私には衝撃的だった。インドネシア民衆側からの戦争体験記などは、それまで聞いたり読んだりしていなかったのだ。

帰国後は意識的にこれに関係する資料を探したがあまり見つからなかった。ようやく1980年代後半になり、インドネシア人自身の体験の翻訳本や研究者の著書で、その実像・実態がおぼろげにつかめるようになった。

その後インドネシアの駐在は1981年年初から約2年のみ。駐在先はアサハンプロジェクトの拠点である北スマトラのメダン市。私が赴任して3週間後に生まれた一人娘とは、生後8ヵ月半に初めて対面、約1年の家族生活となった。ゴルフ・麻雀とは無縁な私にとっては、女中さんをはじめ、インドネシアの人々・社会に多く接することが出来る絶好の機会となった。休日は家族でベモに乗り、買い物や映画を見に出かけたりした。娘が初めて発したインドネシア語は天井を指差して“Cicak!(ヤモリ)”。歩き始めた娘に“Awasi!”、“Jatuh!”などを日本語に混ぜて使うこともしばしばあった。

1985年、火力発電プロジェクトでインドネシア電力公社(PLN)の研修生を約20名受け入れる機会があった。私は会社の技術者と彼らとのコーディネーターとして、社内で存分に動きまわることが出来た。彼等は私とほぼ同年代。自国では幹部候補生で、結構仕事熱心だった。気軽に対応してくれ、何人かは私の家にも遊びに来てくれた。

入社以来ずっと私が心がけていたのは、知り得たインドネシア関係の催しなどには可能な限り参加すること。おかげで1998年のスハルト体制の崩壊前後、来日したインドネシアの著名人、例えば女優のクリスティン・ハキム氏、文学者プラムディア・アナンタ・トゥール氏、人権活動家ムニール氏の挨拶・講演を直接聞くことが出来た。今思えば実にラッキーだった。

2000年頃、日本インドネシアNGOネットワーク(以下JANNI)の存在を知り、すぐ個人会員となった。当時JANNI代表は松野明久外大教授であり、久しぶりに母校の生き生きした現況に接したのだ。そして定年退職した2007年8月末、お世話になった会社の皆さんにお礼を述べ「明日は学校の後輩達とインドネシアに出かけます」と挨拶し、職場を去った。

定年退職後 2007年9月1日、ジャカルタで松野先生や約10人の後輩達と合流、翌日ボゴール近郊のホームステイ先に向かった。後輩達、それもほとんど女性達は、4月に入学したばかり。その若々しさにはうらやましさを感じた。約1週間の滞在後、後輩達が別れ



際、お世話になったホストファミリーに泣きながら別れを惜しんでいる光景は、何か今後の草の根の交流の拡がりを感じさせる期待が持てた。

その後、JANNIの運営委員をしておられる拓殖大学の先生の紹介で、拓大生達と東カリマンタン州のオランウータン保護地区やバリ島でのゴミ処理状況などを巡るス

タディツアーに参加。普通の観光旅行では得られない貴重な体験だった。

インドネシアへはその後2回訪問した。まず、松野先生や後輩達と再びスダの地でホームステイ。みんなでぎやかに農作業の手伝いもした(写真④)。3年経つとちょっとした変化があった。前回ホームステイした家庭は、井戸水を地下約10mから手で汲み上げていたが、電動ポンプに変わっていた。室内には冷蔵庫が鎮座していた。インドネシアの庶民の生活向上を垣間見た実感。前回、私達を世話してくれた男女の若者達はすでに親元を離れて都市近郊で働いている由。

そして2012年末、あるNGO主催のスマトラ・リアウ州でのエコツアーに参加。現地の若者と僻地で森林破壊に直面している地域を訪問した。電気・ガス・水道のないところでの村人との語らい、国立公園内を象の背中に乗って散策(写真⑤)し、竹で編んだ筏で下流の集落まで半日がかりで移動するワイルドな経験もした。

その後約3年はインドネシアを訪れる機会がないが、JANNIの運営委員として、会報の発送や各種講演会の開催のお手伝いをしている。会員のかなりの方は大学の先生や研究者で、頻繁にインドネシアへ出かけておられるので、インドネシアの政治経済文化などの現況はよくわかる。研究者の多くは私達と違い、外国語学部出身者ではないが、さすがその道の専門家と感心することが多い。

日常生活では、趣味の1つであるインドネシアの伝統音楽や現代音楽をCDで聞くのを楽しみにしている。また、インターネットで得たインドネシア語の記事を辞書片手にふうふう言いながら読んでいます。地元の埼玉県蕨市では国際交流のボランティア活動をしていて、時々インドネシア語を使う機会も。小学校の土曜学校でインドネシア語の“さわり”を教えたこともある。

日常生活では、趣味の1つであるインドネシアの伝統音楽や現代音楽をCDで聞くのを楽しみにしている。また、インターネットで得たインドネシア語の記事を辞書片手にふうふう言いながら読んでいます。地元の埼玉県蕨市では国際交流のボランティア活動をしていて、時々インドネシア語を使う機会も。小学校の土曜学校でインドネシア語の“さわり”を教えたこともある。

以上の如く、日常的に直接的にインドネシアと関わっているわけではありませんが、私にとってこれからもインドネシアはかけがえの無い貴重な存在であることには変わりはありません。



ご報告

会長 宮崎 衛夫 (1965 卒)

インドネシアの経済成長率が少し減速しています。2016年の成長率は前年同様の4.5%程度と予測されており、ジョコウィ新政権への期待が大きかっただけに失望の声も聞かれるようになってきました。ただ、1人当たりの名目GDPは2014年には3,500ドルまで伸びており、購買力平価でみた場合は、既に10,000ドルを超えています。

日経新聞が日・中・韓の経営者にアンケートを行った結果、自社の製品とサービスの市場として一番有望な地域として、日本と韓国は東南アジアを、中国は自国としております。更に日本の経営者は消費市場、生産拠点ともインドネシアを最重要国として挙げており、今後の同国の成長に大いに期待していることがうかがえます。東南アジア最大の経済大国として、昨年末に発足したアセアン経済共同体を主導するインドネシアの動向には、我が国にとってもますます目が離せない状況です。

このようにインドネシア国に対する期待が大きく膨らむ中、やはり気になるのが「インドネシア語専攻の定員問題」です。日本・インドネシア関係の重要性から見て、

インドネシア語の定員(10名)が外国語学部の25言語



昨年7月に関東支部長に就任し、関東支部在籍者名簿を引き継ぎました。

名簿を分析すると、①昭和49年までの卒業生105人②昭和50年から平成までの卒業生54人③平成卒業生96人の合計255人のOBのお名前が登録されています。

その中で、メルアドの記載あるOB全員にご挨拶のメールを発信し、昭和卒業の方から28人、平成卒業の方から13人、合計41人からご返事を頂戴しました。

即ち、年次が下っていくほど関東支部在籍OBの数が減っているということになります。在阪の大学ですので、仕方ない一面はありますが、年次が下がっていくほどに人数が増えることが、同窓会の発展に必要不可欠と思えます。

よって今年の卒業生の方々に、咲耶会からご案内頂き、インドネシア語専攻の卒業で関東にて勤務される方々に

中最低位であることについての非合理性についてはこれまで色々な機会をとらえて主張してきました。ここでは1点だけ触れていない点を記しておきます。それは人口比の問題です。モンゴルの人口3百万に比しモンゴル語定員18名、インドネシアの人口250百万人、インドネシア語定員10名。モンゴル語には何の恨みもありませんが、これはどう見ても不合理ではないでしょうか。



これまで大学関係者に幾度となく、インドネシア語の定員増のお願いを続けてきましたが、未だ所期の目的を達せられておりません。昨年11月には、大阪大学の新任総長・西尾章治郎先生とご面談の機会を得、「定員増のお願い書」を南十字星会会長名で提出させていただきました。

総長には私どもの思いを真摯にお聞きいただき感謝しております。本件は大学の経営そのものに掛かる問題でしょうから、同窓会組織としての動きの難しさを常日頃から感じております。今は大学側の前向きな対応を待つのみです。
(カットはジャカルタ・スディルマン通り)

関東支部長 辻本 雅洋 (1975 卒)

メルアドだけの登録をお願いすることにしました。新卒の人に限らず、関東への転入・転出程度の近況のメールを下さることで、同窓会が活性化します。何とぞ皆様にお声掛けくださるよう、お願い申し上げます。



また、2016年の関東支部総会は7月16日に新宿住友ビル内住友クラブで開催します。日が近づけば、改めて関東在籍のOB皆様に支部長からご案内申し上げますので、仲間・友達とお誘いあわせ、奮ってご参加下さい。お待ちしております。

なお、私への連絡につきましては、これまで会社のメルアド【tsujimoto@t-gaia.co.jp】を使っておりましたが、退職に伴いまして、この4月以降は個人のメルアド【m.tsujimoto@canvas.ocn.ne.jp】宛てにお願いします。



キャンパス便り

言語文化研究科 准教授 原 真由子

(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

語劇祭

2015年度は11月21日(土)、22日(日)に行われ、インドネシア語専攻は21日に上演しました。例年通り2年生が中心となり、“Malin Kundang – Cerita dari Minang”という、ミナンカバウの民話をもとにした劇を上演しました。貧しい家庭で生まれた主人公 Malin Kundang がミナンカバウの風習である出稼ぎ(merantau)で成功し、美しい妻をとめない故郷に帰ってくるのですが、年老いた貧しい母親を拒絶します。母親が受けた大きな衝撃は呪いとなり、息子を石に変えてしまうという話しです。Malin が母への思慕とそれと裏腹にみすばらしい老女を母親と認めたくない気持ちとの葛藤、Malin への大変深い母親の愛情とそれ



故の大きな失望、Malinが「石」になった後の後悔をどう演技するかが見どころでしたが、練習を重ねてうまく表現できたと思います。



インドネシア語スピーチコンテスト

11月22日には南山大学で、12月5日(土)には神田外語大学でインドネシア語スピーチコンテストが行われました。南山大のコンテストには、詩の暗唱の部に1年生の栗山和也さんが出場し、2位に入賞。神田外大のコンテストには、グループAの部(インドネシア語学習歴2年以内の大学生)に2年生の山井寛子さんが、グループBの部(学習歴4年以内の大学生)に4年生の寺田しおりさんが出場しました。山井さんはグループ1位、寺田さんはグループ2位を獲得しました。



箕面市連携講座 「インドネシアの“今”」



1月31日(日)、みのお市民活動センターで、箕面市、箕面市教育委員会、阪大言語文化研究科、外国語学部の主催により、インドネシア語専攻の学生が、市民を対象に卒業論文などの大学で学んできたことやインドネシアでの体験を紹介する催しが行われました。

この催しも今年度で3回目となり、中には2年連続で来て下さった方もおられました。発表内容は、学生は十分調べ尽くしているはずですが、参加者にはインドネシアに長期滞在されている方や発表内容の分野に明るい方がおられ、頂いたコメントはとても貴重なものでした。また、市民の方々の非常に熱心な態度に触れ、大学生としてもっと知識にどん欲にならなければと発奮していました。

3 大学合同ゼミ

10月3日(土)、4日(日)に、南山大、東京外大、阪大の3大学合同ゼミを、南山大学を会場に行いました。このゼミ合宿は昨年度に引き続き2回目です。今年度は「インドネシア語の若者ことば」をテーマに、各大学から個別のトピックに基づき発表しました。

阪大からは、2年生10人と3年生1人が参加。3大

学の学生たちが協力し、自分たちで企画から実施まで行うことで、学内の活動とは違った経験ができ、大変ながらも、得るものが多い機会となりました。

サザンクロス講演会



10月20日(火)に、ジャワ舞踊研究家の富岡三智先生を招き「ジャワ伝統舞踊のジャンルと作品」と題し講演会を開催しました。富岡先生は、特にスラカルタ(ソロ)のジャワ舞踊を専門とし、舞踊家としての活動と学術的な研究を両立されています。講演は、もっぱら宮廷内の門外不出の舞踊であったソロのジャワ舞踊が、どのような内外の影響を受けることによって、現在のような宮廷舞踊となっていたかについて多くの映像を用いて、また具体的に衣装や舞踊のふり・動きを示しながらわかりやすくお話し下さいました。



インドネシアの伝統芸術公演

10月10日(土)、箕面市民会館において、在日インドネシア人留学生協会大阪奈良支部(主催)、箕面市国際交流協会、阪大言語文化研究科・外国語学部の共催により、インドネシア伝統芸術公演が行われました。ハノマンがインドネシア中を修行しながら放浪するというストーリーで、演劇、踊り、歌、留学生



協会の活動紹介など盛りだくさんの上演でした。数十名ものインドネシア人留学生の他、インドネシア語専攻の学生、来日していた東ジャワのボヨラリ舞踊団が、舞台に立ちました。客席には、日伊他色々な地域の人々が見られ、和やかな国際交流の会となりました。

ジョグジャ実習

(2回生 山井寛子)

2015年9月13日から30日にかけて、インドネシアの古都・ジョグジャカルタに行ってきました。私にとっては3度目となるインドネシアでしたが、また違ったインドネシアの一面を発見することが出来ました。

スナン・カリジャガ・イスラーム大学のウィスマにお世話になり、午前中はパンチャシラ、インドネシアの歴史、経済、教育、文化などについての授業を受けました。ネイティブの先生方によって行われた授業は聞き取るだけで精一杯でしたが、昨年のアチェ研修の時と比べて、大いに私のインドネシア語力が上がっていることを実感しました。また現地の学生と行った、お互いの宗教についてのグループディスカッションは、イスラームについてより一層理解を深める良いきっかけとなりました。午後からは、アシスタントの生徒たちと市内観光をしました。マリオボロ通りに夕食を食べに出かけたり、クバヤやバティックを作ったり、伝統工芸品の工房にお邪魔して実際に焼き物作りを体験したり(写真①=中央が筆者)。

なかでも一番印象に残っているのは、世界遺産ポロブドゥールとプランバナン遺跡観光です。世界史の教科書では想像できないほどのスケールを目の当たりにして、思わず驚きで声が漏れてしまうほどでした。近づけば近づくほどその遺跡の迫りに圧倒され、外壁全体を覆うレリーフの細やかさに魅入ってしまいました。そして、遺跡の頂上部にそびえ立つ、チャンディと中央部にある大チャンディ。そ



の内部にある仏さまの穏やかな表情。インドネシア最大の仏教寺院を見学して、インドネシアの歴史を直に覗いた気分になりました。

その日の夕方からはプランバナン寺院の前で、ラーマーヤナバレを鑑賞しました。荘厳な雰囲気漂う寺院を背景に、ガムランの演奏や実際に火を使った迫力満点の演出で、とても楽しかったです。

また、イドゥルアドハの日の様子を体験する機会もありました。この日は、早朝から大学のモスクで正装した多くの人々がお祈りをし、牛、ヤギ、ヒツジが神に捧げられるために処理される様子を見学しました。当たり前ですが、日本で普通に暮らしていたら目にする事のない衝撃的な光景で、思わず目をそらしてしまいました。その日の午後、現地の先生のご自宅にお邪魔し、先生のご家族、ご親戚、ご近所さん、そして私たちがサテを食べました。一生忘れられないほどの美味しさでした。この宗教行事に参加して、私たちは命をいただいて生きていることを改めて実感しました。

ジョグジャを訪問し、インドネシアの生活に触れることで、インドネシア語だけではなく多くのことを学ぶことが出来ました。インドネシアの授業を受け、さまざまな所を観光し、インドネシア人の友達と一緒にしゃべり、この2週間は大変有意義な時間でした。研修に参加した全員がこれからの勉強への意識を高めることができたと思います。



《海外研修》 カップリング インター シップ プログラム (原)

平成27年度も、文部科学省の特別経費プロジェクト

事業「広域アジアものづくり技術人材高度化拠点形成事業」の一環で、阪大接合科学研究所（接合研）と言語文化研究科（外国語学部）が主体となり、「カップリングインターシッププログラム」を実施しました。本学の理系・文系学生各2名、現地大学の理系・文系学生各2名の合計8名をカップリングさせ、アジア地域の現地日系企業で研修を行うことで、グローバルな人材育成を目指すというものです。

3年目となった平成27年度は、実施地域が増え、インドネシアを含む計8カ国で行われました。インドネシアの場合は、インドネシア大学と共同し、研修先として3年連続でコマツ・インドネシアにご協力頂きました。時期は8月18日～9月1日



の2週間。まずインドネシア大学で事前研修を行い、残りは文化体験も挟みながら、同企業で工場見学や事業説明などを行った上で、与えられた課題に取り組み、最終的に経営陣に成果報告するというものです。

今回は油圧シリンダープラントにお世話になりました。インドネシア大工学部2人（男子1、女子1）、日本語専攻2人（男子1、女子1）、阪大工学研究科の男子学生2人、インドネシア語専攻の女子学生2人（寺田さん、乙黒さん）が、専門分野と言語・文化が混ざるように2つのチームに分かれて、チーム毎に課題に取り組みました。もちろん、分野や文化・言葉のギャップがあり、チーム内でうまく助け合うことができない場面も多々見られましたが、2週間生活をともにすることで、コミュニケーションの難しさを少しずつ克服していきました。

また、その間、同窓会ジャカルタ支部の方々に夕食会を開いて頂き、学生たちにインドネシアで働く経験をお話し下さったことで、彼らの視野をさらに広げることができました。お忙しい中、大変ありがとうございました。

また、その間、同窓会ジャカルタ支部の方々に夕食会を開いて頂き、学生たちにインドネシアで働く経験をお話し下さったことで、彼らの視野をさらに広げることができました。お忙しい中、大変ありがとうございました。

《海外実習》 ジョグジャカルタとジャカルタ (准教授 菅原由美)

2015年9月13日～9月30日にジョグジャカルタ及びジャカルタにおいて海外実習をおこないました。今回は、ジョグジャカルタの国立イスラーム大学（UIN）スナン・カリジャガ校で、2週間、授業参加、グループディスカッション、宗教学校・王宮・遺跡見学、伝統工芸品製作ワークショップなど盛りだくさんのプログラムで、1年生12人、2年生4人、4年生1人の計17人が参加しました。イスラーム大学構内の宿泊施設に宿泊し、毎日、インドネシア人の学生と行動を共にしていました。

昨年のアチェに比べ、ジョグジャカルタの人々が宗教に関して寛容であったためか、宗教的なストレスを今回は感じなかったと参加学生たちは言っていました。むしろ、インドネシア人の時間のルーズさに、最初はかなりストレスを感じていたようでした。

また、当初、外国語を使い続けることに苦労していましたが、日本で準備していたプレゼンテーションを成功させ、ディスカッションも各グループで熱心に行っていました。ただし、外国人と話すこ

との慣れていないインドネシア人学生の話すスピードの速さに驚いていたようでした。2年生は、ずいぶん話せるようになっていました。1年生はまだ理解は難しいようでしたが、単語を書き留めながら、理解に努めていました。今年は参加学生の男女の比率が半々だったので、お別れ会で、学生たちが卒業式で歌う合唱曲を披露したところ、大好評で、アンコールが続き、結局3回くらい歌ったようです。

昨年同様、学生たちは帰国後も、SNS等を使い、ジョグジャの学生たちと交流を続けています。

(前頁に山井さんのレポート)

ジョグジャでは皆元気でしたが、ジャカルタに着いた時に、それまでの疲れが出たためか、数名が熱を出し、ホテルで休むことになりましたが、残りの学生はジャカルタの大都会も満喫し、今回もOBの皆様とも食事をご一緒させていただきました。ご協力いただきましたOBの方々、本当にありがとうございました。



特別寄稿

Apa & siapa

パソナ国際交流プログラム 2015 のインターン生

=前列左から 2 人目が筆者

Dunia ini Luas

Nussha Mahardhika

(日本語日本文化教育センターに在籍)

Ada idiom dalam Bahasa Jepang yang berbunyi, 遼東之豕 (*ryoutou no inoko*). Kurang lebih jika diterjemahkan ke dalam Bahasa Indonesia artinya adalah orang yang menganggap dirinya paling hebat karena dibesarkan di dunia yang sempit dan tidak tahu keadaan di dunia luar. Agak memalukan memang, tetapi mungkin idiom tersebut sangat tepat untuk mendeskripsikan keadaan saya sebelum saya pergi ke Jepang. Selalu juara kelas sejak SD, bisa berkuliah di salah satu perguruan negeri di Jakarta dengan IPK yang lumayan rupanya membuat saya merasa paling pintar di antara teman-teman dan besar kepala.

Jurusan Bahasa Jepang di perguruan tinggi kami kerap kali melakukan kerjasama dengan perusahaan-perusahaan Jepang yang mencari mahasiswa untuk di kirim ke Jepang dan bekerja di perusahaannya sebagai *intern* selama satu atau dua bulan. Merasa kemampuan Bahasa Jepang saya sudah mumpuni, saya pun memberanikan diri untuk mendaftar di program *internship* yang di buka di kampus.

Sesampainya saya di Jepang, semuanya tidak semulus yang saya bayangkan. Begitu banyak istilah-istilah khusus di kantor yang belum saya pelajari sebelumnya. Ditambah lagi mahasiswa *intern* lain yang sangat cerdas dan jauh lebih



pandai Bahasa Jepangnya. Saya merasa sangat kecil. Kecil sekali.

Kemudian, syukur *alhamdulillah* pada bulan September tahun kemarin saya diberi kesempatan berkuliah di *Osaka University* lewat beasiswa Pemerintah Jepang untuk mahasiswa yang berkuliah di jurusan Bahasa Jepang. Di sini saya juga bertemu dengan lebih banyak mahasiswa dari berbagai negara yang juga sangat cerdas dan cemerlang. Lalu, saya juga bertemu dengan para mahasiswa jurusan Bahasa Indonesia *Osaka*



ジャパンビジネスインターン
シップ 2014 (後列左から 2 人目)

University yang sangat mahir sekali Bahasa Indonesianya. Bahkan mungkin lebih mahir dari saya yang orang Indonesia asli.

Merenungi pertemuan saya dengan berbagai mahasiswa sebaya yang jauh lebih segalanya dari saya membuat saya sadar bahwa dunia ini ternyata sangat luas, penuh dengan orang-orang yang hebat, dan ternyata saya terlalu cepat puas dengan apa yang sudah saya capai.

Akhir kata, saya sangat bersyukur karena telah dipertemukan Tuhan dengan Bahasa Jepang dan dapat juga merasakan tinggal di Jepang. Berkat itu semua saya dapat menemukan diri saya yang belum saya ketahui, bertemu dengan banyak orang dari berbagai negara, dan juga belajar dari pengalaman orang-orang yang telah saya temui. Dan tidak lupa juga saya mendapat pelajaran yang sangat berharga yaitu agar selalu belajar, selalu rendah hati dan tidak menjadi 遼東之豕 (*ryoutou no inoko*).





ジャカルタ広島県人会

中重 祐介 (2006卒)

簡単に自己紹介いたします。大阪外大では、国際関係学科中国語コースを専攻し、就職するまでインドネシアに関わることはありませんでした。卒業後、東南アジア向けに、機械工具の輸出を主とする貿易会社(創業者も大阪外大卒)に就職し、インドネシアの担当を命じられたのが、最初です。今は、ジャカルタに赴任して、5年目を迎えます。

大阪外大を目指したのは、中学3年の時に参加した、タイへの研修旅行がきっかけでした。私の地元、広島市が主催する、中学・高校生向けの研修旅行にたまたま当選し、10日間タイを訪問したのです。ホームステイや、ボランティア活動などに参加したのですが、その時感じた異国の匂い、熱気、全てが当時の自分にとっては衝撃でした。

それから、海外と関わりたい、海外で仕事がしたいという気持ちが強くなり、大阪外大に進学。中国語を学んだものの、海外であればどこでも良い、という無節操な考えから、気がつけば、インドネシアの土を踏むに至っていました。

赴任先は、日本と現地企業との合弁会社で、当地の製造業向けに、機械工具などの営業をしています。

さて、南十字星会への寄稿を仰せつかり、何を書こうか考えていたのですが、なかなか思いつきません。私の日常は営業・接待・ゴルフ・たまに地方旅行など。企業の駐在員としては、ありがちな生活を送っているのでは、と思っています。それ故に、日々の暮らしを書いても、ありきたりでしょうから、いろいろ考えた結果、赴任してから深く関わり、当地の生活で励みと



なっている、私の地元、広島県人会について書きたいと思います。

広島県人会、通称 ”もみじ会” は、登録会員約100名で、年に数回の懇親会、ゴルフコンペ、最近ではプロ野球・広島をジャカルタから応援する、広島カーブ観戦会などを適宜、実施しています。

会員は広島出身の方はもちろん、仕事で広島に赴任していたとか、高校・大学が広島だったとか、はたまた広島カーブが好きだとか、広島とゆかりのある方なら誰でも参加できます。年代も20~70代と幅広く、在インドネシア歴30年以上の大先輩や、広島の大学に留学していたというインドネシアの方もいらっしゃいます。ジャカルタ広島県人会と書きましたが、チレゴンやバンドン在住の方もいらっしゃって、年に1~2回は、バンドンなどでのゴルフコンペも恒例となっています。ジャカルタで発行されている「じゃかるた新聞」には、会員募集を兼ねて、毎回記事を書いていただいています(写真⑤=2014年5月に掲載されたコンペの記事)。

私は、当地に赴任して2ヵ月目に参加してから、都合のつく限り参加しています。初めは、不慣れなジャカルタで、先輩方からいろいろと情報を聞けたらと思いい、参加していましたが、今では広島弁が飛び交う中で、郷土やジャカルタ生活の話をするのが楽しみになっています。

例えば…

「ジャカルタの渋滞はほんまにひどいねえ。わしゃ今日ここまで来るのに、5時間もかかったよ」

「じゃけえ、混む前に出発しんさいよって言ったじゃろうが。はあもう、みんな飲みだしとるよ」

「ところで今年のカーブはどうかいのう？今年は優勝できるかのう？」

「できるといいのう。今年も観戦会やってジャカルタから応援しようやあ」





他県の方には訳が分からず恐縮です。ただ、当地に赴任して広島弁も関西弁も中途半端になり、変な標準語を話している私にとって、広島弁を思い出し、地元にいるかのような雰囲気味わえるのは、仕事を忘れてリフレッシュできる、いい機会となっています。

昨年からは、私が世話役の幹事を務めるようになりました。きっかけは、それまで幹事を務められた方が帰任されたからですが、県人会のおかげで知り合いも増え、ジャカルタ生活も充実したものに出来た訳で、次は自分が恩返しできればと、微力ながら盛り上げていきたいと思っています。毎年何人かは、帰任や転勤でインドネシアを去る方もいますが、それ以上に新規登録の方も増え、ますます賑やかになっていけばと願っています。

南十字星会とのつながりは、数年前に当地での懇親会に参加させていただいてからです。外大では異なる専攻語でしたが、この地で仕事をしている以上、インドネシア語を何とかこなさねばなりません。また、インドネシアについても、理解を深めねばならないと思いながら、まだまだ諸先輩方には到底かないません。そんな新参者に対しても、おらかな先輩たち。酒の強い方もおられます。毎回、会食しながら話をうかがい、勉強になることがとてもたくさんあります。本当に感謝しています。

最後に、少しでも宣伝を。ジャカルタに、「en塾」という劇団があります。日本語を勉強している、インドネシア人の大学生が、日本語でミュージカルを演じる劇団です。ある日本人女性が、中心となって立ち上げられました。

同劇団では、「桜前線プロジェクト」という、2020年の東北に向かって毎年、桜前線のように北上して公演を



行なっていくプロジェクトがあるそうです。今年は4月2日に広島公演、5、6日に東京公演を予定しています。

興味がおありの方は、ぜひ「en塾」で動画を検索してみてください。私は、劇団の関係者ではありません。広島県人会として、僅かながら協賛はしましたが、全く個人的に宣伝しています。というのも、動画を見て、素直に感動し、また、日本とインドネシアの、「草の根」の交流を進めている活動を、応援したかったからです。

実は、後になってウェブ・サイトを通じて知ったのですが、この劇団名の「en」は、日本語をもじっていて漢字の「縁」「円」になります。“縁”あってめぐり会った学生たちが、“円”のように仲良く演劇に取り組み、“円熟”を目指そうということだそうです。



考えてみれば、私がお社からインドネシアに来させてもらったのも、不思議な縁です。そこで、広島県人会や南十字星会で多くの人たちと出会い、そして劇団「en塾」と触れ合うことになったのも、まさしく『ご縁』です。これからも縁を大事にして生きていきたいと思っています。

とりとめのない話となりましたが、このあたりで筆をおくことにします。もしインドネシアにお越し

の際、どこかで縁あってめぐり会うことにでもなれば、幸いです。

【写真説明】①②県人会ゴルフコンペ=2014年9月バンドン・ギリガハナゴルフ場で ③④広島カープ観戦会=2014年10月ジャカルタのイタリアンレストラン「Misti Canza」で ⑤南十字星会懇親会=2014年9月ジャカルタの日本食レストラン「Yuki」で

寄稿

Apa & siapa

Irian Jaya / Wamena Suku Dani

磯浦 美恵子 (1958 卒)

1992年8月に訪れたIrian Jayaの写真集です。一番の思い出は Kepala Desa と2人で食事をしながら (カレーらしきもの) インドネシア語で話が出来たこと。

何しろ、石器時代 (?) の人と話をして通じるのですから、このためにこそインドネシア語を勉強してきたような醍醐味でした。



彼曰く。奥さんが複数いる。もっと欲しいけれども、Emas kawin の babi が足りないのだと。

彼らにとっては babi が唯一の財産です。女性が子供を背中におんぶし、前には babi を抱っこして自分の母乳を飲ましていました。住むのも寝るのも一緒です。



コテカについて 細くて長い、太くて短いとさまざま。聞いてみると、種族によって違うとのことでした。土産用に模様入りのカラフルなものが Pasar で売ってましたので買って帰りましたが、瓢箪と同じでとても軽いものでした。



消息

ひとこと (敬称略)

本永重貞 (42 卒) = 山口市
旧軍落下傘部隊勤務後、家庭の事情で公務員から農業に従事。のち空港ビルの代表役を経て現在ボランティア活動。外語時代の歌「インドネシア タナ アイルクー タナ トゥンパ ダラクー」を思い出す。95 歳。極めて健康。

東郷芳温 (44 卒) = 東京都千代田区
入学したのはシンガポール陥落の年で、競争率 23 倍でした。内藤先生、イスマイル先生でした。同期に市村真一、司馬遼太郎らの著名人がいます。いまだに BENGAWAN SOLO を歌っています。91 歳になりましたが、まだ大阪外語生のムードに生きています。

吉田勝博 (44 卒) = 福岡市
いつも会報をお送り頂きありがとうございます。小生大した病氣もせずに元気にやっております。

山口 寛 (58 卒) = 大阪府枚方市
一億総活躍社会が叫ばれる中、生涯現役の気概を失うことなく、余生を ASEAN 諸国との関わりの中でお役立ちできればと思っています。

西田達雄 (60 卒) = 東京都調布市
南十字星会関東支部総会は平成 28 年 7 月 16 日 (土) です。辻本新支部長の下に集い、楽しい一時を過ごしましょう!!

小原一浩 (63 卒) = 大阪府大阪狭山市
南十字星会会報第 21 号拝読しました。今後も継続して発行出来る事を祈っています。多くの同窓生が賛同され、発行の為の協賛金が充分に集まるといいですね。

堀田 実 (63 卒) = 千葉県船橋市
お魚を釣って、お魚を料理して…。頑張っています。

藪中芳夫 (63 卒) = 東京都狛江市
インドネシアでの新幹線、日本の受注失敗はとて残念。インドネシアでのロビー活動家がいらなくなったのでは…。

岩谷英志 (64 卒) = 大阪府池田市
歩行の不安定は相変わらず。状態がこれ以上悪化しないようリハビリに励んでいます。

内原正司 (64 卒) = ジャカルタ
年頭にアメーバ赤痢、その後デング熱に罹り、3 日間 ICU の初体験も。2 月初旬に無事退院後は、何とか出社しています。健康第一ですね。

井上久生 (66 卒) = 奈良市
毎号新旧会員の記事を楽しみにしています。

扇谷竹美 (66 卒) = 千葉県佐倉市
2015 年 9 月、久々にジャカルタを訪問。地下鉄工事のせいでもありましょうか、交通渋滞は倍加しているとの印象でした。

沖 政夫 (66 卒) = 神戸市
毎号楽しみにしております。
朝倉俊雄 (67 卒) = 横浜市
会報第 21 号を楽しく、なつかしく読ませていただきました。とくにジャカルタ発の 2 本の記事、様変わりした首都の様子に思いを馳せました。辻本新支部長のもと、関東支部を盛り上げていきましょう。
廣澤義幸 (76 卒) = 大阪市住之江区
ASEAN 共同体の船出に期待をこめて、注目しています。
勝田英紀 (82 卒) = 大阪市東淀川区
昨年心不全で入院し、あやうく死ぬところでした。今更ながら医療の進歩に感謝しています。また大学教授でよかったと思っています。
高田恵壮 (01 卒) = 奈良県香芝市
少額ですみません。本人インドネシア・ジャカルタ在住です。
舛田奈己 (03 卒) = 広島県安芸郡
フリーランス翻訳者 (特許・日英) をしています。

◆お悔み申しあげます◆
下記の方々の訃報が届きました

三宅 勇(42 卒)=尼崎市 15 年 10 月
加藤利雄(49 卒)=河内長野市 15 年 5 月
西村耕二(56 卒)=枚方市 15 年 1 月

インドネシア料理 **Pisang Molen**

インドネシアでは屋台で気軽にお菓子のスーパーで手に入る材料で作れるレシピです。

Pisang Goreng より少し手間がかかりますが、時間が経ってもサクッとおいしくいただけます。何度か手土産に持参し、みんなに好評でした。

屋台ではバナナの代わりにパイナップルや芋が入ったものがありました。アレンジではバナナと一緒にチーズや



チョコレートを巻いたりしたものも。私のおすすめは、オリジナルですが、バナナの代わりに餅を具にして、揚げたてのところに砂糖をまぶして食べる Mochi Molen です。ぜひお試しください。

(西野めぐみ=2005 卒)

Pisang Molen のレシピ

【材料】小麦粉:250 g
砂糖:65 g ベーキングパウダー:小さじ 1
マーガリン:65g
卵:1 個 水:大さじ 1 (あれば)
バニラエッセンス:数滴
バナナ:適量

- ① ふるった粉類と砂糖を合わせ、マーガリンと卵 (バニラエッセンス) を加え、手で混ぜてポソポソの粒状にする
- ② 水を少しずつ加えひとかたまりになれば、冷蔵庫で 15 分ほど休ませる
- ③ 麺棒で②の生地を 2~3mm 厚さにのばす
- ④ ③の生地を 2.5~3 cm 幅のリボン状に切る
- ⑤ 長さを 3~4 等分にし、更に太目の親指大に切ったバナナに④の生地を巻きつける
- ⑥ 中温の油できつね色に揚げて出来上がり